

装置により窒素を作り兩者壓縮合成してアンモニアを作ると云う日本式合成法の硫酸工場建設に着手したのに始まり、昭和6年4月年産150,000t設備を完成し爾後數次の擴張により昭和15年年産能力330,000tとなり我が國最大の硫酸工場となつた。然るに終戦直前の空襲により工場設備の90%を破壊され運休のやむなきに至つた。終戦後直に復舊に着手し昭和23年9月第二次復舊工事を完成して年産設備能力250,000tになつたが昨年は種々の事情のために実績170,000tであつた。現在硫酸の外に液體アンモニア、アンモニア水、壓縮酸素、同水素、液體酸素及びアルゴンを製造販賣している。當工場のアンモニア合成法は東京工業試験所法と云う日本唯一の國産技術を採用して居り、従つてリンデ式窒素分離機以外は悉く國産機械を使つて居る。合成爐は内徑700mm外徑1060mm長さ7m、低Ni-Cr鋼で日本製鋼所製、合成熱で500°Cに熱せられるが、300氣壓に耐え立派に運轉されているには大に心強く感じた。又製品倉庫の巨大な硫酸の山には驚いた。

業界愈々繁忙を加えつゝある今日見學兩工場の御發展を祈りつゝ午後4時歸途についた。(室井嘉治馬)

浦賀造船所見學記事 (第12班)

折悪しく4月3日は風雨強く、加うるに寒冷をも覺える天候にもかかわらず、熱心なる會員40數名は定刻浦賀造船所の門内に集合した。10時を少し過ぎて1行は2班に分れて案内に従い造船工場から見學を始めた。

工場は三浦半島東京灣寄りの突端にV字型に深く喰い込み、三方丘陵に囲まれた靜かな自然の良港にあり沿岸は總てと云つて良い程浦賀造船所工場で占められている。

2基の大船台には數日中に進水するものと着工したばかりの船體が盛に工事を急いでいる。分工場船台には海上保安廳の特殊艇の作業中である。又港内には戦標船の改造中である大祐丸、八軍特殊艇、沈没引揚船の青函連絡船、佛蘭西船等大小種々の修理船を浮べている。

作業場では、實に豊富な資材の中で大鋼板の半自動式瓦斯切斷作業、造型作業、裝備品の熔接作業と、一ぱいに活氣をみなぎらしている。次で造機工場の鑄造場に赴いた一同は雨に濡れた衣類を電氣爐附近の餘熱を利用しながら少憩、暫くして非鐵、鑄鐵の鑄造状態を見て機械工場へと廻る。其の間特にプロペラー及びそのシャフト又は機關部、船體部に裝備する船舶獨特の各種品目の加工作業に興味は集注され質疑が盛んに行われた。

正午會社のクラブ食堂で昼食をとり終つて所長村田義鑑氏親しく御出席の上御懇篤有益な御高説を拜聴し2時半見學を終り歸途に着いた。

所長のお話は大體次の様な主旨であつた事を記しておく。

(1) 創業55年の古い歴史を持ち従業員は6000名を擁しその中6割は地元出身者で又その1200名家族は親子揃つての勞務者であり従つて勞資の協調も緊密温健と云う特異性がある工場である。

(2) 浦賀造船の經營は多角方針で新造、修理の他船用陸用エンジン、クレーン、コンベヤー、陸上諸建造物其他を實施している。

(3) 従業員の總てが有能者である必要はない。少數幹部が優秀有能者で一般は業務に精勵して貰へるものであればよい。

(4) 船舶設計者は各自専門の1部門を擔當し最大能率を目標として設計しているが船全體を考える時荷積の能力、便否、配置、重心、吃水の不平等を考え技術の能率を犠牲にしても機械、構造物の配置を變更して再設計を命ずるのが常である。

(5) 造船生産費中の7割は材料費でありその經費も誠に尨大であるが常に資金を得て潤澤な材料を購入して工場に渡し生産の促進を計り利益を擧げること人並以上の努力をしている。

以上であるが終りに工場見學に當り御多忙中にもかかわらず御懇切なる御説明御案内をして頂いた皆様に厚く感謝の意を表して筆をおく。(近藤)